

祖霊名の政治学——キプシギスの祖霊名再考(その1)

気がついてみると、この連載を始めてからもう5年半以上の歳月が経ってしまった。我ながら、驚くべきことだと思う。最初の数回は、気儘なエッセイ風に筆を進めた。その内に、堅い論文調にも、また紹介文風にもなり、特にエッセイ風に戻ることもあった。それでもこのように長く続いたのは、ひとえに、私の気まぐれを大目に見て下さった本誌編集部と読者の皆さんの寛大さのゆえである。

これまで、アフリカの人々の間に見られる名付け慣行の出来るだけ多様な側面をとり上げようと努めてきた。それでも、まだ触れていない興味深い事例も少なくない。一例として、フィパ人の出自名やランゴ人の戦名などがすぐ思い浮かぶ。しかしながら、アフリカの事例を隈なく網羅するのは、とうてい私の力の及ぶところではない。この連載を締め括る時がいよいよ近づいてきたと、強く感じ始めている。

ただし心残りなのは、資料的な制約から、どの事例もかなり静態的に扱わざるを得なかったことだ。時間的な変動の相や、同じ社会の様々な人々が諸々の立場から名付けに関わる姿を具体的に示すことが十分にできなかった。

人々が「名前を生きる」有り様を現場で捉えて仔細に論じることができるのは、実際にそこで参与調査をした人類学者だけだ。幸い私も、1979年以来、ケニアのキプシギスの人々の間で10度以上参与調査を続けてきた。そこで、もう数回連載を続けてキプシギスの名付けのそうした側面を紹介し、一区切りを付けたいと思う。

■ハイエナ怖い！

今回とり上げるのは、第30回でも触れたキプシギスの人々の祖霊名である。

キプシギスは父系で、父系祖先の霊魂が同性

の新生児に再来するという信仰をもつ。赤ん坊が生まれた直後の「祖霊呼び儀礼」(kurset)で、産婦の夫の母が夫の氏族の直近の祖先たちの名前を次々と呼びあげる。そして、赤ん坊の嘔が祖霊からの応答であり、その時に名前を呼ばれていた祖先が再来したと判断する。ただ、実際に「祖霊呼び儀礼」に立ち会うのは氏族の女性たちだけであり、父親や他の男性親族は赤ん坊の祖霊名を事後的に教えられるに過ぎない。

人々は、再来した祖霊が赤ん坊の魂になり、赤ん坊はその祖霊とソックリな姿形や性格をもつという。例えば、私が敬愛して止まなかった故モンゲック老人は、胸にある入口が狭く深い窪みを見せて、自分に再来した祖先がグシイ人との戦いで負った槍の突き傷だと語った。

この点で興味深いのは、近くの市場で時々出会ったジョン・キプタラム・アラップ・マリティムである。彼は私と同じサウエ年齢組に属する50代後半の人物で、奇妙な臆病者として知られる。ただ、決して単なる弱虫ではない。グシイ人の住居地に接している私の調査地では、ヒョウが人を襲ってかみ殺すという事件が最近幾度か起きた。でもマリティムは、ヒョウだろうがグシイ人との戦いだろうが少しも恐れたりはしない。ところが、人々がまるで犬ころだと嘲るハイエナだけは怖くて怖くて堪らないのだ。例えば、人々と地酒を飲んでいても、夕方が近づくとソワソワし始め、やがて酒を量り買いつると、自宅を目差して大慌てで帰っていく。殊にハイエナが出没しやすい雨期はそうだ。

マリティムにこのような不可解な行動を取らせているのは彼に再来した祖先の霊なのだ、と人々は言って笑う。マリティムは実に全うで勇敢な人物なのだが、彼は自らの意志でハイエナへの恐怖を制御できない。彼に再来した祖先が

ハイエナに食い殺された人物だったからだ。

■招かれざる者

ただ、どの氏族も赤ん坊の祖霊名を皆全く同じ仕方では決めるわけではない。再来する祖霊は、往々妊婦の夢の中に現れて、彼女の赤ん坊へ再来する意志を伝える。そして、「祖霊呼び儀礼」は実質上その追認の機会となる。幾つかの氏族では、それが常軌だと考えられている。

「祖霊呼び儀礼」では、再来が強く期待されている祖先の名前から順に呼び上げていく。例えば、男の赤ん坊なら父の父、次にまだ再来していないその兄弟……という風に。万一、父親やその兄弟が亡くなっていけば、彼らが最優先される。ただし、父系祖先なら誰も名前が全て呼び上げられるわけではない。必ず排除されるのは、①独身のまま死んだ者、②邪術と呪詛を組み合わせた「宣誓」(mumek) と呼ばれる蛮行に訴えた者、③自殺者である。「宣誓」は、近隣裁判や法廷裁判の判決に服従しない者が身の潔白を証明しようとして採る最終(報復)手段だ。ただそれは、正邪の如何にかかわらず、まるで毒草の蔓のごとく当事者双方の氏族の筋を追って行って、遠縁の者から徐々に捕らえ、一人一人殺していくと言われている。

これらの逸脱的な人物が再来したら、子供は同じ行いを繰り返すことになる。だから、彼(女)は永遠に忘れ去られるべき者、つまり「永遠に死ぬ」べき者なのだ。その人物の埋葬が済むと、誰一人として一切彼(女)の事に触れなくなる。偶々子供がその人物の名前を口にする、死霊に取り憑かれるぞと厳しく戒められる。

■悪阻の政治学

微妙なのは、狂人の場合である。上の①②③のように「祖霊呼び儀礼」で初めから排除されるわけではないが、当然ながら、できるだけ回避したい祖先である。なかなか赤ん坊が嘔くしゃみをしない場合に渋々名を呼ばれるようである。

ところで、第34回では妊婦の悪阻様現象(food cravings)に触れた。これは、妻が高価

な食べ物や品物をねだったり、家事を放棄するという、広く世界各地で知られている現象である。いわば胎児を質にして妻が行う、夫とその親族への反抗だという解釈もなされている。

キプシギスでは、胎児への再来が期待される夫の父系祖先(X)に因んで、妻は「Xの母」という擬似子称を婚入と同時に与えられる。また、同じ複婚制でも妻単位の家の法・経済的な独立性がきわめて高いので、キプシギスでは悪阻様現象は穏やかだと報告しておいた。

とはいえ、事情は、殊に再来する先祖が妊婦の夢に現れると信じる氏族では、必ずしも単純ではない。次のような例がある。チェブカルワル村の若者リチャード・ラポソは1991年にレジナと結婚した。二人は忠実な伝統主義者で、妻は辛い家事を少しも厭わなかった。ところが、1992年に妊娠したレジナは、突然、生命のあるものであれないものであれ、目にする一切のものに悪態をつき始めた。また折々、深更、俄にわかに家の戸を開け放って実家へと、あるいは何処へとも知れず走り出した。やがて見つけ出されても、彼女は何故そうしたのか何時も答えられなかった。当然、家事はなおざりになった。そして、夢に現れたのは、メリレイという気のふれた祖先だと判断された。生前、彼女にそっくりの振る舞いをしたからだ。ところが、出産後、レジナは嘘のようにまた正気に戻った。

この事例では、ラポソの周囲の人々は、再来した狂人の資質は赤ん坊に受け継がれないから、歓迎はしないものの、メリレイの再来には問題がないと語った。一部の人はoindet(個人として特定される祖霊)とkurenet(集合的な祖先)の違いに言及した。「祖霊名」は「oindetの名前」(kainetap oindet)とも「kurenetの名前」(kainetap kurenet)とも呼ばれる。kurenetを直訳すれば「呼ばれる者」となる。つまり、「kurenetの名前」の用法が正しいと述べる事で、子孫に再来するのは繰り返し現れる名前だけであって特定の祖先の靈魂ではない、と主張しているのである。

(こんま とおる 神奈川大学 社会人類学)